

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第139号（2017年12月）

風に吹かれて（116）

白井啓治

・雀ほっこり小春日を浴びてチュン

もうすっかり冬の陽気。午後の2時になると、陽は夏の夕日のような色合いになる。この季節になると、かつての撮影現場を思い出す。「監督オーブン撮影はあと30分が限度です」と撮影部から言われた。フィルム撮影では、陽が赤くなるとフィルムで色温度の調整をするのであるが、それも限度があつて、今の季節の屋外撮影は2時過ぎぐらいで終了となつた。今のデジタル撮影ではその制約がなくなつてきているようだ。撮影の現場を退いて20年ほどになるが、この季節になると陽の赤さを見るたび条件反射のように強迫観念にとらわれて苛々としてしまう。どうも年末の陽の色は、人の気持ちを急かす何かを持っているようだ。師走とはそういうことなのかも知れない。

先月号で、このところ不愉快なことが多い、というようなことを書いたら、さっそく須釜にお住いの兄より、私の不愉快&ボケ防止のために：折々の意見、と題した原稿を送っていただいた。投稿原稿ではないので、紹介するわけにはいかないが、日々、折々の新聞記事の中から気になるこ

とを取り上げ、小生の言う莫迦野郎談を書いておられる。

兄からは、私の不愉快解消法です、とメモ書きが付されていたが、来年は是非投稿を願いたいものと思つている。小生の莫迦野郎談は品も分別も欠いたものであるが、兄の莫迦野郎談には品も分別もあり読み手を愉快にさせてくれる力がある。ここを借りて投稿のお願い申し上げます。

2017年も残すところ僅かとなつたが、今年は本当に愉快なことの少ない年であつた。愉快が無くて不愉快が続くと、不愉快が怒りに変わり、怒りはそのうちに憎悪に変わるという負の連鎖を起こしてしまうことになる。

国政を振り返ると、モリ・カケ・忖度の荒れ模様も総選挙で禊が終わつたという顔を見せ、北朝鮮問題を軍国化への必然のような意見まで出てくる始末。年の瀬が見えてくると大相撲の暴力問題で馬鹿騒ぎ。テレビのバラエティー報道の大賑わいであつた。

国際政治を見ると、これほどの混乱・混迷する時代はなかつたのではないかと思えるほどである。どうやら人間と云う奴は歴史に学ぶということを何処かに置いてきてしまったようだ。どうやら人類と云う奴は喉元の熱さを忘れたら、我欲の塊に

なるようだ。

我欲が塊になると、事実も事実でなくしたがったり、嘘を事実と変えてみたくなるようである。馬鹿な、と思うがそのうちに地球は平らであるとか、太陽が地球の周りをまわつていと言ひ出す輩が現れてくるかも知れない。

しかし、これは笑い話として言つてはいられない現実がもしかしたら来るかもしれない。物事を考察することを忘れて、フエイクニュースにばかりのめり込んで、一喜一憂のようにしている多くの現状をみていると、まぎれもない事実がまぎれもない嘘になつても不思議ではない。

当会報「ふるさと風」も来年は満12年を迎える。思えば良くぞ続いてきたものだと思う。会員の全員が、参加以来一度も休むことなく書き続けてきたことは、驚異であると思つている。五百部ほどの少ない発行ではあるが、毎月読んでくださっている人も少なくない。有り難いことである。

個人的には聊かしんどく思うこともあるが、糞にも役立たない会報だと思つても、止めたらそれでおしまいである。何かに役立っているとは思つていないが、少ない人数であつても読んでくださる人がいるというのは、役立つか否かは別に、存在させる意味はあるだろうと思つている。

人は物事を語らなくなつたらお終いだと思つている。かつて雪深い東北に逗留していた時、囲炉裏火を囲んで「語ろうよ、語りましょうよ」と言われたことを今も小生の裡に消せないものとして残っている。一方通行ではあるが、こうした文に呟くことも必要なことだろうと、勝手に思つてはいる。

良い年を迎えたいものである。

鹿の子遺跡と五万堀古道

(1) 鹿の子C遺跡

鹿の子C遺跡は、常陸国分尼寺跡の前の道を北へ300mほど行ったところにある。常磐高速道路が建設される際に発掘されたもので、現在は高速道路の脇に案内板が残るのみである。しかしここは蝦夷に対する大和朝廷の歴史を考える上で非常に重要な遺跡であるとともに奈良時代当時の人口などの統計資料が発見された遺跡でもある。発掘によれば、旧国府の工房跡（北側）や中央部に住居が集中し、南側は官衛施設があったと推察されている。当時の住居は3×4m四方の方形に規則的に配備され、それぞれ北側に竈を配備していた。出土品は主に風土記の丘の展示室に保管されている。出土した文書から判読できた年号は749〜795年頃であり、奈良時代末から平安時代前半にかけて営まれた遺跡であることが判明した。また8世紀後半から始まった蝦夷征討の武器供給基地として重要な位置を占める遺跡であったと考えられている。発掘調査は約一万七千平方メートルにわたって行われ、見つかったのは竪穴式住居跡69軒、連房式竪穴遺構5棟、掘立柱建物跡31棟、工房跡19基などで、漆紙文書などには749〜795年頃の年号が書かれていた。

漆紙文書（うるしがみもんじよ）は、奈良時代から平安時代初期（8〜9世紀）のもので、役所などから払い下げられた公文書が、漆液を入れた容器のふた紙（落としぶた）として使用されたため、漆が付着して現在まで残ったもので、文字は赤外線カメラで判読したものです。（展示品は文字が読めるようにした複製です）



漆紙文書

（鹿の子遺跡：風土記の丘展示室に展示）

この文書の量は有名な長岡京跡（京都府）や多賀城跡（宮城県）で出土したものより多量で、当時の人口集計までわかる貴重なものです。

この鹿の子遺跡は、発見された遺構や出土品から、鉄製品を中心に製造していた国衙工房跡と考えられ「地下の正倉院」とも呼ばれています。

(18) 五万堀古道

鹿の子C遺跡で武器を製造して蝦夷征伐の前線に送っていたと考えられていますが、それについてもその道が古代東海道の延長として作られていた跡がいくつか見つかっています。少し見つけた例を書いておきましょう。

平安時代中期に作成された延喜式（927年完成）には古東海道の駅家（うまぎ）として常陸国府（右圖）から先にも駅家が記されている。

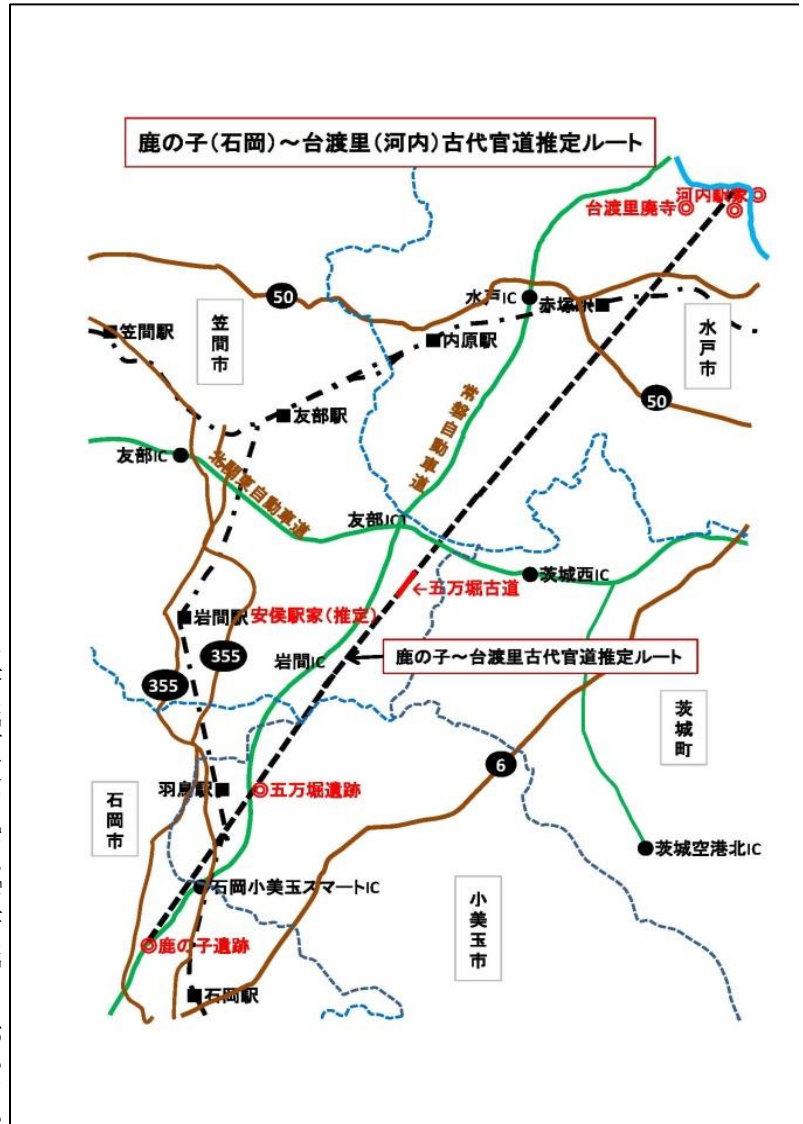
常陸国府　・　安侯　・　河内　と続く。

この安侯は名前から、笠間市安居（あこ）あたりと

みられており、河内駅家（こうちのうまぎ）も水戸市的那珂川手前の渡里町と川の向こう側の上河内・中河内あたりの2箇所にあったと常陸国風土記に記されている。さて、この安居（あこ）に近いところに五万堀という地名がいくつか残されている。鹿の子C遺跡の役割を考える上でこの五万堀を検証してみたいと思う。



この五万堀で古代東海道の官道跡と思われる遺跡が発見された。この場所は、石岡からは石塚街道（県道52号線）で涸沼川を「仁古田」の橋を渡り、その先の十字路の信号を左折すると、常磐高速の友部サービスエリア（スマートインター併設）に出るが、この信号から南西方向に斜めに細い道が続いている。入口は林や民家の庭の中を通過するようになっている。その先が五万堀の古道は見つかったのだ。すぐに広い空き地に出る。恐らく発掘もされたとところだろう。古道らしい道が真っ直ぐに続く。



この古道は、道路の両側には側溝が掘られ、側溝中心間の幅で6～11mで、7世紀後半のものから10世紀にわたって数種類の道路の跡が見られるという。幅の広い程時代が古いという。道路跡は南南西方向にまっすぐ続く。この発掘調査は道路と交わるところで終わっている。その先には栗林が広がっていた。この道を真っ直ぐに石岡方面と水戸方面をつなぐと、この官道のルートがほぼ見えてきた。

五万堀古道を見て、「五万堀と名づいているところに古代の官道がある」のではないかとかなりの確信を覚えた。この道路は笠間市仁古田(にこた)と長菟路(ながとろ)の町の境界になっている。この二つの地名もとても興味深い。仁古田(にこた)という地名は東京なら西武池袋線に「江古田(えこた)駅」があり、すぐ近くの中野区側の「江古田(えこた)」が駅の元になっているが読み方が違う。もう一つかすみがうら市の神立にちかいところに「江後田(えごた)」という地名がある。多分川の上流や中流で、あまり流れがなく湿地帯になっている場所だ

ったのではないかと思う。それもそれほど大きな川ではない。江古田は江古田川、仁古田は涸沼川、江後田は霞ヶ浦に注ぐ菱木川のそれぞれ上・中流部にある。比較的小さな川だが、昔の舟での移動を考えると意外に重要な場所だったのかもしれない。

さて、もう一つの「長菟路(ながとろ)」地名だが、「古代の道」冊子ではこの古代官道にちなんだ名前と書かれており、石岡の小目井跡に近い場所に同じような名前を見つけて古道との関連を推論しておられたが、これはどうも違うだろう。長瀬、長戸呂、長土呂、長渡呂、長淀、長外路、長戸路：…など漢字が違うが同じ読みの地名がたくさんある。これは川の流れが緩やかになり材木などを流した時のたまり場所になったところと解釈している。秩父の長瀬などは観光名所で溪谷美と急流を下るライン下りの場所を思い浮かべるが、多分その途中の流れが穏やかになって広がったところを示す言葉だと思われる。

さて、この道を南南西に延長すると小美玉市の五万堀や五万窪を通り、石岡の国分尼寺の300m程北の鹿の子C遺跡の場所(高速道路下)にでる。また北北東に延長すると、河内駅家(こうちうまや)のある渡里町と河内町に真っすぐにつながる。地図で見ると、現在の常磐高速道路とほぼ平行に走っていたと思われる。高速と交わっているところが鹿の子C遺跡である。そして、五万堀や渡里町などに八幡太郎義家の伝説が伝わっている。

八幡太郎義家が蝦夷征伐に通った時(後三年の役)

源氏の呼びかけにたくさん武士が集まり、かすみがうら市の四万騎農園のある広大な草原で4万騎が集まり、この場所で馬の訓練をし、石岡に来た時には5万騎に膨れ上がり、五万堀などの地名になったという伝説があるが、これはこの古代官道のことをさしたのではないかと思う。鹿の子遺跡そばに五万堀の名前が昔あったというが今は地図にはない。小美玉市とさらにその先の涸沼川近くの笠間市に五万堀の名前が残っている。

この鹿の子C遺跡の場所から東北方面に武器を供給していたと考えられるから、鹿の子の地名の由来も鹿ではなく鉄のことを指していたとする方がすっきりした解釈となる。従って、道路があつて名前ができ、そこに鎌倉時代になって八幡太郎の伝説が追加されたのだらうと思う。さて、この古道の途中、小美玉市の五万堀のすぐ近く(羽鳥駅の東側に五万窪という地名がある。ここで、東工大の発掘調査により、古代の遺跡が見つかった。五万窪遺跡と呼ばれているが、古代製鉄炉(たたら製鉄)跡とみられ、室町時代の遺跡だと考えられている。五万堀古道を考えていくと、一気に昔の武器製造工場の一端が見えてきたように感じた。官道も各国府をつなぐ道で、行政の連絡道とばかり思っていたが、蝦夷との関わりが重要だったのではないかと思えてきた。坂上田村麻呂が阿弓流為を滅ぼし、胆沢(いまむ)城を築いたのが西暦802年。今残されている鹿の子遺跡には昔の西暦780年にあたる暦(具注暦)が発見されている。この鹿の子が武器供給の拠点であり、道を整備する必要もあったのだと考えられる。

悲喜こもこもの回顧録(2)

菅原茂美

先月に引き続き、年代順に回顧録後編。

他人の回顧録など興味ないかもしれないが、フィクションを織り交ぜる事なく、単純だが、真実のみを並べ、自分史の実録としたい。

⑦ 20～40歳代…スポーツ熱中時代

茨城県職員の福利厚生事業として、スポーツ関係では野球、バレーボール、テニスの県庁内各課対抗と、出先の各機関対抗戦を合わせて、全県的に毎年行われる。

私は高校時代、病気でスポーツは殆ど何もできなかった。中学時代はバレーボールとバスケットボールの選手であつた。県庁時代は超多忙で殆どスポーツは何もできず。出先時代は、バレーボールの選手兼監督(9人制・主にセッター)として、幾度も勝利を重ね、最高は、全県大会準優勝を2回経験している。

アフター5、近隣の中学や高校の体育館を借り、かなりハードな練習に励んだ。殆ど経験のない仲間でも鼓舞すれば、高校バレー部経験者が3人もいると大方どうにかなる。テニスと野球もかなりやったが、私の得意種目ではなかった。他に卓球、バドミントン、登山も楽しかった。登頂は岩手山、鳥海山、富士山。他に低い山は多数登ったが、頂上制覇後の爽快感この上なし。

さて、中学2年の時、我が家に競走馬の血を引く農耕馬がいたが、村の「花祭り」の一環として馬産地岩手では、「草競馬」が行われ、私は騎手として大人に混じって鞭を振るつた。こちらはトッポを走っていたのに、隣を走る大人の騎手に私の馬を叩く妨害を受け、3位に落ちたのは誠に残念

であつた。馬に慣れていた事は、後に獣医師となり、仕事上、大いに役立った。車は排気ガスを出すから馬で通勤考えたが、飼育費が月40万円ぐらいかかるので、やめた。

更に出先勤務の時代、ボーリング大会で、何度か優勝したが、投球直前、精神集中すると、それほど大きな騒音が鳴り響く場内で、全く全ての音が聞こえなくなった経験がある。ストライクの連続で、これには自分でも驚いた。

テレビ観戦ではサッカー、大相撲、プロ野球、高校野球、ゴルフ、バレーボール等かなり夢中。アントラーズが負けると数日体調不良。逆に優勝した時はカニなど、どっさり買ってきて、全家族でハイテンションの祝宴。バカ丸出し。

⑧ 40歳代…行政トラブル

主として「家畜伝染病予防法」という法律を根拠に長年、伝染病の発生予防・蔓延防止の仕事をしてきた。家畜というものは自分の所有だから、どのように飼育してもよい…というものではない。一定の制約(予防注射・消毒など)の下に守るべき基準がある。もし規制を守らず伝染病が発生すると、他人に多大な迷惑をかける。それを防ぐ為、国補までつけて畜産を支援するが、基準を守らない人が多過ぎる。

私はオーストラリアの牧場を視察した際、あの広い牧草地に殆ど雑草が生えていない。訳を聞いたら、もし雑草を生やせば、種が風で飛び、他人の牧草地に雑草を生やす事になる。それは絶対に許される事ではない…と。英国流の自由主義・民主主義の根は深い。根の浅い日本の自由主義は、自分勝手がまかり通ることが、自由主義だと勘違いをしている人が多すぎる。

犬の狂犬病予防注射も法律で義務付けられているが、我が国の犬の半数以上が予防注射を受けていない。現在、清浄国は日本とオセアニアだけである。他は大陸続きということもあり、清浄化ができていない汚染国である。にもかかわらず旅行者は客寄せのため、狂犬病発生国への旅行にいたり、予防注射の必要性を隠している。汚染国で犬に咬まれ、帰国後狂犬病が発症し、死亡する人がしばしば見受けられる。

畜産においても、予防注射や定期消毒は義務付けられているが、それを怠り、いざ伝染病が発生すると、行政の指導が悪いから多大の損害を被ったと警察へ告発する人もいる。私の役所もかつて告発され、警察で任意の事情聴取を受けた事がある。その時私は、1年間に11回も啓蒙リーフレットを発行していたので、それを示し警察に説明した。警察は『わかった』と告発をすぐ却下してくれた。行政いじめを得意とする変な組織や、一方的発言に与くみするマスコミもあり農民を煽る。義務を果たさず、権利のみ主張する未熟社会。それが現在の日本。

⑨49歳…業績発表会で全国大会最優秀賞受賞

茨城県は、世界初や日本初で家畜伝染病がよく発生する所だ。真に残念な記録ではあるが、裏を返せば、県内獣医師が、いかに厳しく日頃モニタ―観察をしているかの証拠でもある。いわゆる「初発」を見逃していない…という事。

私が県に入った昭和34年、世界で初めて、牛の「異型悪性流行性感冒」(後に「イバラキ病」と命名が発生し、世界の注目を浴びた。その他日本初の「豚パルボウイルス感染症」「豚水疱病」「豚オーエスキ―病」など、多数本県で初発。

昭和57年、初生豚が死亡する「豚オーエスキ―病」が茨城県内で日本初発した際は、勿論日本に対策のマニュアルなど何もなし。こんな場合の基本対応はオールイン・オールアウト(*1)。しかしこんな荒療治をすれば、ほぼ1年間無収入。農家は干上がってしまう。私は創意工夫で臨機応変の防疫対策を試み、ある農場の清浄化に成功した。その実績を国主催の業績発表会で発表したところ全国の最優秀賞に輝いた。以後は国の支援もあり全国22都道府県で、50回ぐらい講演を頼まれ超多忙であった。各県から国に講演者紹介など依頼があれば、国はすぐ私を紹介してくれたという訳。以後、専門雑誌に頼まれ多数論文も書いた。それを読んだ米国の科学者が、世界最高権威の英国の獣医学専門誌に、私の論旨を紹介してくれた事実もあった。

そんな事を根拠に、後に農水省推薦で、外務省嘱託となり、外交官パスポートを与えられ、海外の獣医師に、日本の獣医学技術移転事業に従事した事は、私の人生最大の誉れであった。

更に国は国際協力事業の一環として、発展途上国の獣医師を招き、私の役所が1年間、その指導役を担わされた事もあった。

【*1..オールイン・オールアウトとは、ある農場に強烈な伝染病など発生した場合、全頭淘汰し、完全消毒の後、清浄な家畜に全て入れ替え、新規巻き直しを図る事。消毒は屋根裏の埃や、木材やコンクリートのひび割れの中までスチームクリーナーにより加圧温熱殺菌。それを2週間くらい間を置き3回繰り返す。即ち畜舎と敷地全体の完全消毒を行う。終えたら1か月ぐらい放置観察。それを終えたら試験的に、その病気に対して全く免疫のない「子畜」をモニターとして導入、数か月

飼育観察して全く異常がなければ、その農場は清浄化されたものとみなし経営を再開する。全過程は、ほぼ1年かかる。】

⑩60歳…定年退職・宅地購入・建宅

一人娘であった妻の姓も名乗らず、私はずうずうしくも妻の家で暮らしていた。義母の面倒は見たり後ろめたい気持ち持ちは持ち続けていた。

ところが定年退職したその年、長男の嫁さんが、妊娠を機に、我々親と同居したいと、申し入れてくれた。こちらは飛び上がる喜び。その前後に偶然にも、隣接地が競売になり、2回にわたり計100坪を買増したばかり。既存と合わせ宅地は166坪となった。これでも狭い感じ。私は田舎の広い宅地で育っているため、孫達には、広い庭で十分遊ばせてやりたかった。

【隣接地110坪は東京の暴力団K組の所有。市から草を刈るよういくら指示されても、実行しない。虫や蛇など発生し我が屋敷に入ってくるのでやむなく、任意で私が草刈りを何年か続けた。するとK組はどこで調べたか毎年私の所へ歳暮を贈ってくるようになった。いくら断つても、低調な言葉づかいで、深く礼を言われた。】

一方住宅は、家族が増えても、既存の建物で生活できない事はなかったが、思い切って建て直し2階建62坪。私と長男の共同住宅。即ち、2世帯住宅で、いわゆる4世代同居。

退職金や預金の殆どをブチ込んだが、何ら悔いはない。次々生まれる孫たちと同居は、こんな嬉しい事はない。勿論私は退職後も、県の嘱託として、結果的に80歳まで20年間働いた。全国的に行政獣医師不足は本県も同じ事。技術屋は、退職後

も健康で新技術をしつかり取り入れ、OB面をして幅を利かさなければ、仕事はいくらでもある。辞めた人はタダの人…という概念を、決して忘れない事を肝に銘じている。

⑪ 60歳以降…専務理事の責任の重さ

世間からあまり評判の良くない「天下り」で私は5年を過ごした。本来県が行うべき事業を、経費節減のため、公益社団法人県が多大の出資に委任し、その組織を責任もって運営させる。その為、県は専門知識のある退職者を「専務理事」として送り込み、県行政を円滑に進める…という訳で、一概に天下りが悪いと云うものではない。偶に、高給を貪り、ろくな仕事もしない者がいるから世間の非難を浴びる。

私が再就職した組織は①家畜伝染病を予防するための全国共通の自衛組織で3年。②畜産飼料の安定供給を図るための全国共通の組織で2年。次々後輩が卒業してくるから、短期間で交代はやむを得ない。現在は65歳でなければ年金は満額貰えない。そんな事情もあり県は退職後、自動的に社団法人などに再就職させる。

私は両協会の専務理事に就任する時、妻に覚悟させた事は、私自身又は職員の実績で、もし組織の経理に大きな穴をあけるような事があつたら、自費弁償の義務を負う事を承知しておいてくれと言ふ事。専務理事とはそれほど責任は重いのである。両協会とも年間予算数億円であつたが、現役時代よりむしろ、きつい勤務であつた。しかし無事両協会を勤務し終えた事は、誠に満足であつた。

⑫ 60歳代…国際協力

先ほど⑨で述べた日本の獣医学技術を、海外獣

医師への技術移転事業ということで、中米ホンジュラス国へ派遣され、懸命に任務を果たした。同国では国民の栄養改善のため、豚肉の増産を図りたい計画がある。しかし現在同国に豚の伝染病などが、どのように浸潤しているかのデータがない。そこで我が国のJICAがプロジェクトを立ち上げ、伝染病の国内一斉調査の応援をする。さらに改良された種豚を増殖・供与して、国民に近代養豚を定着させる。

現地に赴任してみたら、驚きの連続。しばしば子豚がいなくなる。泥棒の所為とみて警備員を配置したが、人影がないのに子豚は次々盗まれる。ある時、おなかをポコンと膨らました大蛇(ボア)が逃げていくのを目撃した。以後子豚のいる部屋は網で囲うなど大変な出費。

街の中の道路は舗装しているが、ちよつと外へ出ると、未舗装。熱帯のスクールで道路はズタズタ。いわゆる乗用車は尻餅で走れない。政府に道路の補修を申し入れると『穴ボコに落ちて死ぬ奴はバカ!』と相手にしてくれない。その為プロジェクトは、日本から持つて行つた、ランクルとパジェロを使用。ところがこれら4駆は、ギヤングが最も欲しい乗り物。ある時我々は田舎道を走っていたら、案の定、チンピラギヤングが拳銃をもつて近寄つてきた。しかしこちらは武装した警察官がガードしており、簡単に追い払つてくれた。何しろ、かの国では警察官は年に給料は10か月しかもらえない。後は自分で稼げ…というわけ。高速道路は牧草地の中を走っている、色々の家畜が自動車事故。牛はゆっくり横断するから事故に合わないが、馬は飛び出すので、しばしば事故死。すると羽を広げると2倍もあるスピロテというハゲワシが短時間で骨だけにしてしまう。ハイ

ウェイの脇には、馬の骸骨がゴロゴロ。

日本では国や地方の議員などよく外国視察をするが、先進国のみではなく、発展途上国にもぜひ立ち寄り、世界の情勢を広い目で見てほしい。先進国の贅沢は途上国の資源枯渇に繋がり、人類全体の平等という観点からは、犯罪に近い行為である。まして食品棄却など論外の重罪。

人類が発祥した熱帯とはどんな所か…と日頃興味を持っていたので、今回はアフリカではなく中米の熱帯ではあるが真に楽しかった。まず驚いたのは果物が豊富。見た事もないトロピカルフルーツ。多くはグロテスクだが味は真に美味。グレープフルーツなど、その辺の道端にいくらでも実つて、熟した実がゴロゴロころがっている。熟したヤシの実の果汁は、種類によりとてもおいしい。樹で熟したバナナは超美味。

それにラテンアメリカという所は、国民が実に楽天的。夜遊ぶために昼休み3時間休養。それにスペイン系の足の長い美人がいくらでもおり、居酒屋などでフラメンコをリクエストすると、情熱的眼差しで、いくらでも踊つてくれる。サルサやプンタなどのダンスを60歳過ぎた私などに無理やり教えてくれる。

カリブ海の島国も超楽天的。ある土産物店のおばさんに、マヤ王の彫刻面を『まける!』と言つたら、『今夜わたしを抱いてくれたら、タダでもいいよ!』ときたもんだ。

マヤ文明の遺跡を訪ねたら、歴代大王の彫像が並ぶ中で、途中歯が抜けたように一部欠けている。そこには第〇〇代大王の彫像は大英博物館に…などと書いてある。冗談じゃない。私に言わせれば、大英博物館とは、「盗品陳列館」ではないか。アジアの仏教遺跡や、エジプトのピラミッド遺跡など、

白人は何の権利があつて持ち去るのか。保存のためというなら、その場においてしっかり養生すればよいではないか。

電力安定供給は当たり前…と思うがとんでもない。私が泊っているホテルの近所である夜突然銃乱射音。訳は50歳過ぎてやっとテレビを買い、サッカー放送を楽しんでいたらテレビが突然プツリ。国営発電所が予算不足でしょっちゅう停電。頭にくて自宅の塀に向かい、マシンガンをぶっぱなし続けたのだという。ソ連崩壊によりその武器が、キューバを通じ世界に流れた。

帰国の時、現地の人へ「ラクレス（オオカブトムシ）を土産にもらったので、ホルマリンを注射して持ち帰ったら、マイアミ空港で麻薬探知犬に騒がれ、警察関与の酷い目にあつた。英語とスペイン語の片言説明でやっと解放された。

プロジェクトの日本人スタッフは、出入りのベテラン。マラリアに罹らなかつたのは私一人のみ。理由は熱帯なのに半袖・半ズボン禁止。異状なくとも予備的に「キニーネ剤」を毎日飲み続ける…というJICAの規則を私は確実に実行したから。しかしアメーバ赤痢に感染し、3日で体重が7kg減り死線をさまよつたが無事回復。

もし病気や事故で死亡したなら国が相応の保証をするという事であつたが、元気で帰つてきたので、女房のヤツ、がっかりしたかな？

⑬ 60～70歳代…食肉衛生検査

世界中で日本の乳肉卵は最も安全であると信じている。乳牛は人畜共通感染症にかかつていないか全部調べている。肉について大中家畜は1頭ごとに獣医師が食肉検査を実施している。卵については採卵鶏の親鳥を検査（サルモネラなど）している

し、食鶏もすべて検査。BSE（牛海綿状脳症）については世界最高水準のきつい基準で検査している。国民にあまり知られていないが、日本の獣医師は縁の下で力持ち。私は80歳まで15年ほど食肉検査で働いた。

⑭ 72歳…「風」の会入会〜今日

2007年11月入会。12月号から「風」の会に毎月一度も欠ける事なく投稿を続けてきた。

入会に際し、ホラは良いがウソはいけない。自己責任で何を書いてもよろしい。と言われ、長年役所勤めで、型にはまった固い文書のみ書いてきた自分としては正に青天の霹靂。独善と偏見を顧みず、しかも調子込んで、自分の専門外の事まで饒舌を振るつた。しかし基本とする所は、「人間とは何か」の追及。人間が人間らしくこの地球上で生きていくためには、何をなさねばならないか！何をなしてはいけないか！を常に念頭に置き、過剰に増え過ぎた人口が、この地球環境を荒廃してはいけない…が信条。

『現在の地球は未来の子孫からの預かりもの』という概念をしっかりと頭に刻み、今の今、生活に便利なら何でも造り出し、地球環境を汚染したり、資源が枯渇するような略奪は厳に慎まなければならない…というのが終始一貫した私の主張である。偽の文明を繁栄させるために大脳を膨らましたのではない。人類も単なる自然の一種の生き物。特別の権利があるわけでない。

55年間も車を運転してきたが、人身事故は皆無。多少の物損事故はあつたが大事には至っていない。電話詐欺やら諸々の犯罪にも巻き込まれず家族全員無事に生きてきた。

がんになりやすい体質遺伝などあるらしいが、

両親兄妹ともがんで亡くなっている。私も、現在3種類のがんに襲われ、特に悪性リンパ腫という血液癌で、視神経がやられ、片目の視力を失つた事は残念でならない。そんなわけで、終末も近いと認識し、自分の戒名は自分で附けた。【安本丹院頓珍漢居士】。何はともあれ、文筆や囲碁・将棋にスポーツ、そして仕事上の愉快な仲間や、しっかりとしたファミリーに恵まれ、まずまずの人生であつた。なお私がいつ死んでも借金と隠し子は絶対にないと言言している。

アフリカで生まれた人類の祖先は、幾多の難関を乗り越え現在、世界各地に拡散。この「遙かなる旅路」の果てに現在の我々が存在する故、先祖の労苦に報いるためにも、郷土を一層大事にしなければならぬ。地球の人口収容能力（50億人）を超える人口過剰（現在73億人）を抑制し、奇跡のこの美しい惑星を、争いのない、緑豊かなパラダイスとして、永遠に守り育てたいもの…。その為には互いに利己主義を抑え、協調主義を貫くことこそ、肝心と考える。

（完）

昔学んだ「伝統芸能の話」から 木下明男

軍国主義復活と伝統芸能

1 米・日反動は軍国主義復活のために伝統芸能を総動員している

伝統芸能と言うと、雅楽・神楽・能・狂言・歌舞伎・里神楽・にわか・各種の語り物・各種の謡い物・各種の踊り・人形劇・仮面劇・講談・落語、

その他非常に広い範囲のものが入るが、元それらは非常に多くの大衆を動員していても、極めて古い形で全国の農民とバラバラに結びついているか、または都市の限られた市民とだけ結びついているか、どちらかです。戦後、テレビ・ラジオ、その他のマスコミの勢力が急に伸びたのと、反動勢力が社会の反動化のためにこれを利用しようとしていたと、両方でそれまでそれらに触れられなかった人たちの間へ一度に広がった。その結果、それらの芸能が一層反動的・退廃的なものに変えられたり、また講談や落語のように、テレビやラジオの時間の都合で、勝手に切り刻まれて、すっかり芸能性を失ったものもある。

こうして、伝統芸能に一つの危機が生まれた。米・日反動は、伝統芸能を広めることを通じて、大きくこれを壊し墮落させた。このままいけば伝統芸能の大切な特色は失われてしまう。そこで、勤労者や民主勢力の間から伝統芸能を正しく守り育てようとする運動がおこった。うたごえ・労音・わらび座・民族芸能を守る会・田楽座・ふきの会・こぶし座、その他の組織がそれです。明らかに、伝統芸能を巡って資本家階級と労働者階級と、二つの階級の間に大きな闘いが起きて、それが新しい段階に入ったと思われる。アメリカを中心とする世界帝国主義の危機が益々深まり、ベトナム侵略に代表される戦争の危機が高まってくると、米・日反動は日本軍国主義の復活に一層血まなこになり、そのために一層必死で伝統芸能を利用し始めた。

佐藤政府は、1966年軍国主義復活のために、極めて重要な二つのデータを作り上げた。一つは、絶対主義天皇制時代の、「教育勅語」の新版である「期待される人間像」を発表して、学生だけでなく

く国民全体に押し付けた事、もう一つは大多数の国民の反対を押し切って、無理やり2月11日の「建国記念の日」を作って「紀元節」を復活した事です。そのために、あらゆる文化を利用したが、中でも伝統芸能を嘗てないほど大きく動員した。

1966年10月18日、東京の水道橋能楽堂で「里神楽を見る会」第39回が開かれ、魚河岸後援会の援助で、関係の労働者も動員された。番組は序 幣神楽

- 一 くさかさか（神武ご東征、前段）
- 二 江戸ばやし
- 三 ふつのみたま（神武ご東征、後段）
- 四 葛西ばやし
- 五 天之返矢

で、「くさかさか」「ふつのみたま」「天之返矢」は「古事記」中の巻の皇室神話に材料を取ったものですが、番組の解説でこう言っていた。

「神武天皇に開眼」敗戦後は、国民が永年教へ込まれた皇国3600年史に関し、史学者が改編するようになり、教科書も書き換えられ、記・紀の伝える国土開発、肇国の興起も史実として認めぬという科学的史観によるとはいえ、ことに神武天皇に関しては、おくりな説をはじめ、とかく思いついた異説や取沙汰をされているのは、民主主義時代になった妄動説でありましょう。

記・紀に基づく神楽の舞台でご覧になる神武ご東征物語には、1500年以上に及ぶ、父祖の代から信じ教えられてきた神武天皇の尊いお姿を仰がれましょう。日本人として、この国体の礎を築かれた鴻業を顧みて、少しも疑わずに、信じてまいりましょう。紀元節の復興を曲学阿世論に阻まれて宙ぶら

りにされたまま、未だに解決せず明治100年を迎えるにあたり、明治維新の大業を忘れるような思想の横行する世相には、日本人の性根を失った現われが伺えます。建国の国祭日が早く帰結するように祈ります」

露骨に「紀元節」復活を訴えていました。「くさかさか」と「ふつのみたま」の主人公は神武倭伊波礼昆虫古命の名の神武天皇で、所謂「神武東征」の皇室神話を題材にしたものです。

里神楽は、各地の祭礼を中心に、全国殆どない所ないほど広く行き渡っている伝統芸能ですが、それを軍国主義復活に利用したんです。

同じ10月12日、東京の三越劇場で、義太夫協会の10周年記念公演が開かれた。

番組は

- 一 「絵本太功記」（尼ヶ崎の段）
 - 一 「天網嶋時雨炬燵」（神屋内の段）
 - 一 「檀浦兜軍記」（阿古屋琴責の段）
- が中心でしたが、「太閤記」と「平家物語」から引き出した忠・孝、近松の世話物を改作した女の貞節、此れが内容でした。副会長が、義太夫は忠・孝をもとにした日本独特の芸術で、中・孝と義理・人情さえ失わなければ日本は大丈夫だと挨拶をした。明らかに、文部省の「期待される人間像」に指導され、忠・孝・貞節などの封建道徳の復活を目指していた。
- 同じ10月14日、同じ三越劇場で、文部省主催の「かたりものの系譜」(第21回芸術祭主催)が開かれた。
- 番組は
- 一 常磐津節 「恩愛瞋関守」
 - 二 声 明 「涅槃講式」
 - 三 曲舞 「歌占・地獄の曲舞」
 - 四 狂言かたり 「那須与市のかたり」

- 五 平曲 「那須与市」
六 幸若舞 「和泉が城」
七 さつま琵琶 「小敦盛」
八 奥浄瑠璃 「牛若東くんだり」
九 義太夫節 「御所桜堀河夜討」

(弁慶上使の段)

で、其々最高の芸術家が動員された。九つのうち七つまでが所謂「判官もの」(源義経主人公)になっているのは、不思議のようですが、テレビ・ラジオなどで「太閤記」から「源義経」へと、夥しい大衆を引き寄せた方針と考え合わせれば、直ぐ分る。大衆芸能のヒーロー秀吉も義経も「期待される人間像」に指導されて、軍国主義復活にあくまで利用された。日本歴史も伝統芸能も、反動勢力の手で勝手に歪められ、損なわれて悪用された。

(つづく)

八木蒔から御留川を見、

古城跡、新選組ゆかりの地に行く 伊東弓子

下見に行った印象が良かった。道路沿いの夏草が刈ってあって、塵の落ちていない地域だった。一人で一軒一軒チラシを配って歩いたが、終わったのは大井戸半島に太陽が沈み、残り陽が山際を彩っている頃だった。歩けば人に合える。それがこの活動の喜びだからと八木蒔を歩く会のスタートを切った。

男の人が、時間はあるんだけどノロノロ歩くのが嫌なんだ、という。小学生の字らしい習字が窓に貼ってあった。そういう家が二、三軒あって立ち寄った店にもあった。尋ねると、近くに先生が

いて習っている。

「一生懸命やっている子供たちの習字を、みんなに見て貰って励ましてやりたいから貼っておくんだよ」と愛情込めて話してくれた。チラシの説明をしていると、男の人が「水戸藩と旗本領では違うのか、沖洲と八木蒔は祇園祭をやるんだよ。そういうこと関係してんのか」と聞かれたが私は即答できなかった。これから確かめてみよう。

高台の大きな屋敷へ行った時、「主人と頑張つてこれまでにしたんだよ」と誇らしげに話してくれた女の人がいた。

「日本のお兄さん優しいから仕事も楽しいよ」と二人の若者がたどたどしい日本語で語り、耳を傾けてくれた。

当日は残暑も程々で、森の多い八木蒔、芹沢地区は快適だった。今は旧道となったが、目の前に田があり、漁をする水辺がある。御川筋に面しているのも、水戸藩御留川の規りを押しつけられたつけられた時代は苦労があっただろう。山の所どころに畑があり、登りきった所を国道355号が横切つて人の住む地域と寺や神社を分断してしまっている。

圓勝寺、八幡神社は八木蒔自然環境保全地域の静寂の中にあつた。圓勝寺は八幡神社の別当を務めていたこともあり、ここは神佛習合時代を思い出させてくれるその名残か駐車場も両方で使っている。古い歴史を物語る山門を潜ると、若い住職さんが待っていてくれた。話を聞きながら若い坊さんたちに人の道(仏の道)を確り伝えて欲しいと心の中で願い、期待した。本堂の前の小さな門。土台の石が土にめり込んで門の下の方が大部傷んでいるのが心配だ。

大きな榎の木が二本ある。もう一本は枯れて切

ったそうで、株が残っていた。境内の西の方にも榎が二本見える。お盆の後だからだろう墓地に提燈が揺れて見えた。境内に幾つかあるお堂を覗きながら神社の方へ向かった。

八幡神社は、鬱蒼と両立している木々の下を行く。長い長い参道で人工的な手を加えられていない。だから人々の姿が見えてくる、人の声が聞こえてくるようだ。村中の人で賑わい、近郷近在の人をも包み込んで楽しんだ時間が毎年続いたことだろう。人だけでなくこの長い参道を飾りをつけた鳥が得意気に走つたろう。そんな時代の人々に合つてみたい。苦しみや悲しみは今と同じだろうか。喜びはどうだったろう。

お風呂に行くという知り合いが三、四人参加してくれていたが、先を急ぐという。少しの時間でも共有出来たことを喜び合つて別れた。

狭い畑、山道を下つて行く途中、鹿島参宮線踏切跡に差し掛かった。右も左も山を削つて線路を走らせたのだ。大変な工事だったろう。地区の人が汽笛の音で時間がわかったと懐かしんで聞かせてくれた。長い年月、多くの人が坂を登り降りしてホームの上り下りに分かれてそれぞれ目的に向かつて利用したことだろう。線路跡には草が芽を吹き、木々が育つて木の葉を落とし、枯れて土になり、何百年後には元の山に修復してくれるかも知れない。左の方には八木蒔駅のホームと待合室が残っている。枯草は刈られ、ホームの木の葉は掃いてある様子には、この地区の人の心の優しさが偲ばれる。

稲荷神社が古墳の上にあるという社には、とても高くて急な石段なので、皆行かないと言うので区長さん宅の前を通り過ぎた。

旧公民館は、使用率も少ないらしいが、花が植

えられ、用具類もきちんと整理されている。八木蒔村時代の小学校跡らしい。右側の小山は古城跡らしい。少し先に行くと玉里（大井戸）が見えた。流れがキラキラしている所為か、今迄にない美しい故郷を感じた。高浜の入り江と小川の入り江に分かれる広さも感じる所だった。

若い日、玉造の青年会の人達との交流会があった。話し合いをした後、外を歩き別れ際に皆で合唱した。八木蒔から羽生に行く線路伝いに歩き、少し小高い所で歌った。場所と歌は覚えていないが、Hさんがリーダーだったことと、遠くに玉里が見えたことは、記憶にハッキリ残っている。当時の人はどうしているのだろう。

登り坂はゆっくりで辛い人はいなかった。圓勝寺入口に立てておいた目印の青い幟は目につきにくかった。

手奪橋を渡る時の心遣いが足りなかった。橋の欄干に乗っている河童は小さいので、車を走らせながら見るのは無理だと思ったが、間に合わない。高須で倭尊命の話からこの橋と、次回羽生を歩く時、手接神社へ行く。次回はその繋がりを詳しく話そう。

法眼寺は、ご住職がご法事のため、奥さんが案内してくださった。門を入って左側に芹沢鴨の供養碑をお参りし、墓地の高い所にある芹沢家ご先祖のお墓を見せて頂き、山頂へ続く道を歩いた。

芹沢城跡は登り切った平坦な畑一帯らしい右山際に記念の碑、紹介する案内板があった。森は竹が生い茂り、どこでもそうであるように森も歴史跡も壊していく勢いだ。何とかならないものか、とも思うがこれが自然の姿なのだろうが。

左奥に大宮神社があるのを横目で見ながら、空堀の坂を下った。この枯草はなかなか腐ることも

なく土に戻るには時間がかかりそうだ。

芹沢家の姿は哀れであった。東日本大震災の時、母屋も蔵も塀もすべて崩れ壊れたという。唐家の子孫の方は再建するのは無理ということで、塀だけは市の力で形を整えたという。近所の人の話で、芹沢鴨は子供の頃から元気で活発な子だったそうだ。隣の稔木村の山の木に登って大声で「お江戸はどっちの方だ。行ってみたいな」と言っていたそう。

玉里の川中子の川端前に、土佐塚と呼ぶ碑がある。芹沢土佐守という武士がこの地で病死したので、土地の人が懇ろに葬りその後、塚が築かれたという。

陽の射している所は夏の強い日射しを感じる。集落の出口に店があった。皆で寄ってアイスクリームを求めて一休みした。この店には何度か来ている。夫が仕事について始めての外回りで、この辺をよく歩いた。苦労した若い日が懐かしかったのだろう。玉造方面に来ると必ず立ち寄った店だ。歩く会で初めて立喰いをしている光景も度重ねてきたから出来るコミュニケーションの一つと思えた。子供の日のような一時に一人一人がとても近しく大切に思えて解散するのも惜しかった。

夜は資料の端に載せた小さな絵図を見ながら、この地で必死に生きてきた人を思っていた。

石岡市ふるさと歴史館第12回企画展

兼平智恵子

去る十一月一日（水）より平成三十年一月二十八日（日）まで、石岡が生んだ勤皇の志士の生涯

「佐久良東雄」展が行われています。

佐久良東雄は文化八年（一八一二）牛久領の新治郡浦須村（現石岡市浦須）で飯島平蔵の次男として生まれました。

文政二年（一八一九）、東雄八歳の時に家督を姉キヨに譲り、信心深い両親の勧めもあって、隣村である下林村（現石岡市下林）にある観音寺の吽暢（康哉）に弟子入りしました。観音寺の住職であった康哉は、国学を学んだ学僧で文政八年（一八二五）に真鍋村（現土浦市真鍋）善応寺の住職となった後、天保三年（一八三二）、四三歳で没した。

文政八年、名を良哉と改めた東雄は、天保元年豊山派長谷寺に入り仏道を修行し（この修行中に師の康哉が亡くなる）、康哉没後の天保六年（一八三五）に観音寺を継いで第二八世吽俊と称した。

その後東雄は、皇道の復興に志を持つ一方和歌に通じ、万葉法師とまでいわれた師の康哉への思いは深く、天保六年七月には善応寺十七代住職となった。

このことにより土浦城下の豪商や農政学者そして有力な町人たちとの親交を深め、会沢正志斎、藤田東湖などとの交流もあり水戸藩の思想を深く理解していきます。

天保十二年（一八四二）、東雄は鹿島神宮へ参拝し王政復古を祈願し、親交を深めた豪商色川らと鹿島神宮に桜の苗木千本を寄進し、この頃から還俗の意志を固めていた東雄は天保十四年（一八四三）に還俗。その後の東雄は結婚し、江戸へ出たが、生活は苦しくたびたび色川の援助を受けていました。そのような中でも、東雄の尊王攘夷への志は深まり、多くの歌となつて発表されました。

万延元年（一八六〇）、水戸藩浪士らが大老・井伊直弼を桜田門外に襲撃し殺害した「桜田門外の変」

が起き、その事件の領袖（りようしゅ）の一人高橋多一郎（大阪四天王寺境内で追手に囲まれ息子と共に自刃）をかくまった罪で大坂奉行所に捕えられ、江戸へと送られた。

伝えられるところでは、江戸へ護送される途中、旅籠の主人や出入りの者を集めて「古事記」の講釈をして、国家への意識や考えの醸成に努めることを忘れなかったという。東雄は万延元年（一八六〇）に江戸伝馬町の牢で病没したが、この際「吾、徳川の粟を食まず」として絶食し、餓死したと伝えられている。享年五十歳であった。

明治維新を待たずして亡くなりましたが、明治維新に果たした役割が、明治天皇、明治政府に評価され、明治三十一年（一八九八）「従四位」という位が贈られました。

どうぞ、ふるさと歴史館においての、佐久良東雄展にては更に深く、分かりやすく説明があり、東雄自筆の歌や十五歳の息子に宛てた遺言書など、石岡が生んだ勤皇の志士の生涯をご覧下さい。

石岡小学校敷地内、月曜日休館（祝日の場合は翌日）、入場無料。お待ちしております。

参考資料 国指定史跡 佐久良東雄旧宅

・青いそら整列の銀杏

智恵子

豊田城

小林幸枝

常総市にある豊田城跡へ行ってきました。

豊田城は、正平年間（1346～1370）に桓武平氏一族の豊田善基が小貝川沿いに築いた城です。

周囲は田畑が広がっていますが、姫路城クラスの天守閣は遠くからでも城が望めます。この天守閣は1992年（平成4年）に、多目的ホール、図書室、歴史資料展示室をもつ複合施設として建てられたものです。

豊田氏は、戦国時代小田氏と姻戚関係を結び、下妻城主の多賀谷氏からの侵攻に対抗しましたが、1575年（天正三年）豊田治親が多賀谷と内通した家臣に毒殺されて豊田氏は滅亡し、豊田城も多賀氏の城となりました。

1601年（慶長四年）に徳川家康によって多賀氏が改易されると伊奈氏が治める天領に組み込まれ、豊田城は廃城となりました。

小貝川の堤防上に豊田城址の碑がありますが、実際の豊田城址は、小貝川の工事のため消滅しています。堤防の下鉄塔の横にも豊田城址の碑がありました。

最近では、少し時間がある時、近くの史跡などに足を運んでいます。自分たちの住む地域の歴史の記録をもっと大切に考えていきたいと思っています。

【風の談話室】

《特別寄稿》

命の河を遡り

田島早苗

(10) 岩魚酒

健作は古稀の記念に出版した句集『岩魚酒』の出版記念祝賀会の会場で、「漸く此処まで辿り着いた！」と気の遠くなるような感動に浸っていた。

一時中断していた俳句を昭和五十二年に再開し、同時に全国に展開している俳誌『風』に入会、沢木欣一・細見綾子夫妻の指導の下で遅まきながら俳句の神髄を掴むことが出来た健作だったが、同人に推挙されるのに八年を要すると言う遅咲きの花だった。

媚びもお世辞も無い無器用で一本気の性格は欣一・綾子ご夫妻に愛され、一人息子の事など私的な相談を受けることも度々だった。多くの同人仲間との付き合いも広がり、正に俳句人生満開の感があつた。

時を同じくして地域の『岐阜市合併五十年記念誌』の編集責任者に成り、岐阜を訪れる同人仲間を名所案内するのに四苦八苦したのも今では懐かしい思い出だった。

「そう言えば、同人に成った昭和六十年は事件の多い年だったよな、大韓航空機がサハリンで墜落・ハレー彗星の大接近・日航機が長野に墜落、これは死者五百二十四名と言う大惨事だった。」

「そうそう、つくば万博が開かれ、親父が珍しく茨城へ出かけると言う面白い話題もあった」等々健作の追想は止まることを知らなかった。

健作の吟行スポットは多種多様で、次々訪れる同人仲間を案内するのが生き甲斐に成って居た。特に好んでいたのは僧円空の足跡を辿ることだった。

江戸前期の僧円空は美濃の生まれで、関東・東北・北海道などを行脚、布教の為に彫った仏像が現存するだけでも二千数百体確認されている。鑿で粗く削っただけの円空佛は健作の心を掴んで離さなかった。

句集の出版は最初還暦を記念して、と決めて準備を始め、長田家には平穏な日々が流れていた。

妻呼べば花の中より応えけり 健作

病む妻の郡上言葉やおぼろ月 健作

寝返れば妻も寝返る野分かな 健作

懐石の妻ういういし桃の花 健作

然しこの平穩は、平成二年、母加代が布団に躓いて転び、寝たきりに成つたのを境に脆くも崩れ、やがて入院した加代を見舞う日々の中で、句集出版はお預けに成ってしまった。

岩魚酒を回して飲み生身魂 健作

今日よりは家の長なる夜の冷え 健作

マイペースの健三が倒れ、救急車で運ばれたのは平成四年三月だった。そして五月に加代の逝去、同年十二月父健三の死と、休む間もない平成四年が過ぎると、気落ちして句集に取り組むことも出来ぬまま月日が流れて行つた。

沢木先生は体調を崩しがちになり、顔を出すたびに、「句集はまだか、早くしなさい」と催促されていた。幸いにも本のタイトルは父健三を詠んだ句からの『岩魚酒』と決めていたので療養中の先生に、題名と表装の揮毫を賜り、一生の宝となつたのだ。

平成十一年に脳梗塞で倒れた健作は、幸い後遺症も少なく一安心していたのに、引き続き大腸がんの手術を受け、満身創痍の感があった。健作の勧めで俳句を始めていた由美は「どうしても夫の句集を出版したい」と積極的に手伝い始め、原稿の清書はすべて由美の手で行われた。

多くの人に助けられて古稀記念の句集出版祝賀会が行われたのは平成十三年の八月、同年十一月五日に逝去された欣一先生の御元氣な内に届けられなかった悔しさが、何時までも後を引く健作だった。

出版に際して昭和二十六年から平成十二年に

至る膨大な作品の中から三百五十八句に厳選していただいた林徹先生を始め、お世話になった方々と郡上八幡の盆踊り吟行に出かけたのは健作や早紀にとつては掛替えの無い時間だった。由美さんの気配りも行き届き、夜通し行なわれる盆踊りの人垣に埋もれ、盆唄に聞き入っていた。

♪郡上のナー―八幡出て行く時は、雨も降らぬに袖絞る♪

江戸時代、藩の庄政に悩んだ農民の代表が死を覚悟して直訴の為江戸へ向かったのを、盆唄に託して語り継いで来た『川崎音頭』は哀調を帯び、夜通し踊りながら犠牲に成つた当時の代表の人々の霊を慰めていると言う。

全国から集まつた踊り子や見物衆は、盆唄の歴史的背景も知らずただ踊りに魅せられて居るだけかもしれないが、直訴に向かった人々に届いているだろうか？忘れられない一夜だった。

出版祝賀会以来、医者通いが絶えなかった健作が、平成十七年の春、脳梗塞の再発で入院、難しい手術で一部取り切れなかった血塊があり、長くは生きられないらしい。見舞いに訪れた妹たちには笑顔を見せる兄が痛々しく、胸が詰まって言葉が出ない。

「再手術の道も有るが、成功率はほんの僅か、下手をすれば植物人間になる」医師の説明に由美は「残された時間を大切に、後は自然に任せたい」と子供たちを説得したが、二人の子供は「僅かでも成功の可能性があるならば、お父さんの強い運に賭けたい」と譲らず、再手術が行われ、結果植物人間に成ってしまった健作だった。

眼を見開いたまま横たわる健作、手を握つても声を掛けても何の反応も示さないが、私たちが見えているのだろうか？「私を見て涙を流したから、

兄ちゃん判っているよ」と言い張る明子。どうかそう有って欲しいと願いながら、早紀は心で語りかけていた。

「兄ちゃん『岩魚酒』は素晴らしい句集だよ、皆で吟行した郡上八幡の思い出は、私の中の宝物だよ」

健作は三年間病院をたらい回しにされながら、一度も正氣に戻ることもなく亡くなった。戦中戦後の混乱期に振り回され、必死に立ち直り、家族を愛し、養いながら、素直に愛情表現も出来なかった無器用な男の七十五年、あまりにも早すぎる死だった。

由美は子供達の手で見舞いに出かける事が多かつたが、ある日自転車で出かけて転び、大腿骨骨折の後遺症で足を引きずる姿が痛々しかった。

(続く)

《読者投稿》

やささと暮らし(10)

さと女

・もう11月に

秋も深まつた寒い朝、庭の掃除をしていると、あれ??? ツツジの花が咲いている。春にも見事な花を咲かせていたのに、驚きでした。その日の夕暮れ、空を見上げると様々な飛行機雲の跡が。まるで飛行ショーが繰り広げられているようだった。思わずユーミンのひこうき雲の歌が「空にここがれて空をかけていく、あの子の命はひこうき雲…」浮かんできた。やがて、見たこともないような夕やけが、空一面に赤く広がり、またまた驚いた。

・石岡一高の収穫祭に

年に一度のおまつり（石岡一高の農業祭）に、友人が経営している直売所く石岡そだちへも出店するという。朝8時過ぎから、手伝いに行くとする。朝8時過ぎから、9時販売開始にあわせ、でに沢山の人だかりが。9時販売開始にあわせ、卵やみかん人參など袋詰めをしているのに、もうお客さんは並んでいる。場内アナウンスは繰り返して9時の開始時間までは販売しないで下さいと。

一高の生徒さん達が丹精込めて作った野菜やシクラメンなども沢山並べられている。5キロあるたくさんの方ネギが僅か500円。1時間もしないうち完売。飲食店のテント前は長い行列が出来、「石岡そだち」のお店も一バック100円の卵と蓮、そして酒沼産のシジミに人気が集まった。卒業生たちのテントも賑やか。焼き鳥などを焼いて、とても楽しそうにイキイキ販売していた。

・二層式洗濯機

何処までも青空、筑波山を眺め満開のさざんかの塀を通り、あまりの穏やかさに歩いて歯医者さんへ。いつものやぎさんに挨拶しながら、何とものどかなり。家に帰り洗濯を始めるが、井戸のポンプを取り換えてからとてもいい水がでる。そこで、二層式洗濯機を庭の流しの近くに作り付けた。掃除の後の汚れ物や今までバケツで洗っていた犬の敷物など此の洗濯機が大活躍している。全自動に使い慣れた今、新たに二層式の便利さに感動している。

終了後、久しぶりに楽市さんへ。八郷に来ているよとの電話でいそいそと出かけて行く。ログに続くメタセコイアの巨木はまだ紅葉には早かった。コーヒーを飲みながら樹々に囲まれたテラスでの昼食、贅沢な一時を過ごす。この秋、楽しみにし

ていたミツバチの巣はスズメバチに襲われてしまったとか、残念。

・諸々の展示会

「ふるさと風の会展」街中の石岡まちかど情報センターにて、4日から8日まで開催される。我がエコクラフトの籠はパンジーの寄せ植えでお祝い。うん、中々いいです。

毎年この時期に開催されている「県立こころの医療センター文化祭」約1ヶ月間の展示期間中2回目の販売日、10時からお昼までの2時間限定。朝9時から販売の準備、バザーの方も賑やかに準備がすすんだ。お客さん（患者さん中心）も楽しそうに各ブースを周りお気に入りの物を買っていた。職員さんも売れていますかと、何度も来て気づかしくくれた。帰り際、今度はクリスマス会お願いしますね、と声がかかった。もうそんな季節になるのか、早いなあ。

晴天に恵まれたイベント日和、石岡のイベント広場で開催の「いしおか商工祭」へ。各テナントを覗いてお腹を満たしてからステージライブを。歌あり笑いありのステージだがお目当ては、E.T.（ホテルマリアージュの娘さん）のミニコンサート。

終了後は「八郷のクラフト展」へ、友人と合流してブラブラし、次の「こんこんギャラリ」へ。ここでいろいろなお馴染みさんと出会い、コーヒーを飲みながらひとしきりお喋り。夕方には、楽市さん達と《まんまや》へ、すっかり日は暮れ楽しい1日も過ぎて行った。

・八郷に来る前の職場のOB会へ

川崎まで行くのだからと、足を延ばして横須賀の姉の家に泊してから、参加することにした。

職場から離れて20年も経つのに、いまだに何やかやと交流がある。皆それぞれ年を重ねてしまったが、その後どんな活躍をしているか聞くのも楽しみです。

久しぶりの川崎は懐かしかった。ここ数年で様変わりした川崎、相変わらずの人混み、何処からこんなに人が湧いてくるのか。街はクリスマス商戦にはいったのか更に賑やか、駅前の人だかり。傍に行ってみると、ギター伴奏で歌っている若者がいた。人混みを避けながら会場の「日航ホテル」に、懐かしい顔ぶれが次々と現われ昔話や近況で盛り上がった。当時の院長、現、理事長も82歳になり病院経営の心労を語っていた。一次会が終わり二次会へ、そこでも話は尽きなかった。又、来年まで元気だね、と、それぞれ帰路に。

・うまく編めた

大切に育てていた白菜、毎日水やりをして、虫がいなか点検をしていたのに3日程怠ったら、何と、葉っぱがレースになっていた。もう回復不可能かもしれないが、青虫退治、かるうじて1個だけは食べられるかな、青虫さんごめんなさい。

来客もなく夫も外出、こういう日は絶好の籠編み日和。いままで苦戦した2重の6画編みにもう一度挑戦、七作目にしてやっと気に入った物が編めた。出来上がったグリーン色の籠は今月末、水戸の芸術館に招待され、久しぶりに会う予定の《Mさん》へ、さて、どんなプレゼントを入れて渡そうかな？考えるのも楽しいです。

・色々と思う

朝8時竹細工の為師匠の工房へ向かう。霧がうつすらと立ち込め、山々の何と美しいこと、車を

停め、しばし紅葉し始めた山を眺めた。これから秋も深まり、山々はどんどん紅葉がすすみます。富有柿も益々美味しい季節です。フラワープークではウインターイルミネーションが点灯しました。どんな光の世界が楽しみです。

コロちゃんと散歩、だがここ1ヶ月こころの痛む情景が目に入る。お隣、酪農家さんのおさななじみ、嘗ては賑やかで幸せな家庭が営まれていたのに。今はどこに行ってしまったか？寂しいなあ。

寒い日、外は落ち葉でいっぱい。勇気を出して落ち葉浚いを、5分もすると薄っすらと汗が。キレイになった道を眺めながら、明日もまた新たな落葉が。暫くはこの状態が続くのだろうと、愚痴を言ったら美容体操と思ってやれば良いよと仲間が言う。

・彼方此方でコンサートが

cafe オリーブさんでのジャズコンサート。演奏者もお客さんも、お互いの体調を気遣いあう。お互いに年齢の所為もあり、顔が見えないと心配になる。ランチの後のコーヒーやケーキもぺろりと平らげ、また来月ねと別れた。演奏者の皆さんは1月フラワープークのイベントに出演予定だそうです。

後日ホテルマリアーージュにてErikoさんのコンサートが開かれた。Eriko ファン&応援隊が大勢で会場を埋める。Eriko さんも心を込め、爽やかな透明感のある声で、12曲も歌ってくれた。ピアノの弾き語りもあり、とても良かった。終了後は、彼女を囲んで懇親会を、これからもみんなの心に届く歌を歌って石岡を盛り上げて、色々発信していつてほしいと思う・・・。

・寒い朝

畑は霜で真っ白。コロちゃん飲料バケツの水は凍っていた。我が家に続く道路は今日も落ち葉でいっぱい。樺等の葉っぱは、はらはらと舞い落ち、銀杏の葉はパラパラと音を立てて落ちていく。急に寒くなったのでどちらの葉っぱも一斉に落ちていく。あと2〜3日もすると枝だけになり、本格的な冬に入るのかな？

昨年の今頃は雪が降ったような記憶が。

度々安否確認に来てくれるTさん。外は少々寒かったがペレットストーブ（きりんさん）に火をつけてお茶タイムとなった。お湯はすぐに沸いたが、焼き芋は少し時間がかかった。お芋が焼けていい匂いがしてくると、コロちゃんが盛んに催促。大騒ぎ。隣の猫は遠まききこちらをうかがっていた。日が沈むと共にお客さんは帰って行った。

養生日記

堀江実穂

・某月某日

作業所の主任さんから、眼鏡をかけるように言われた。毎朝作業所で体重を測るのだが、なかなか測定した体重の数値が読めないのを見ていて気が付いたのだそうだ。

耳はとても大切だけど、目はそれ以上に大切だから眼鏡をかけるように言われたのだ。

眼鏡をかけるのは嫌だったけれど、かけることにした。ところが眼鏡をかけてみると、世界が変わったかのように物がくつきりとよく見えるようになった。しかし、ショックなことが起こった。

一番のショックは、鏡に映った自分の顔であった。白髪が混じった髪の毛。たるんだ顔に皺とシ

ミ。これまではソフトフォーカスで自分の顔を見ていたものだから、私ってまだ若いし結構いけるじゃん、なんて思っていたのだ。井

次にショックだったのは、部屋の埃であった。私の部屋は埃もなくきれいだと思っていたのだったが、部屋の隅には綿埃が溜まっていた。天井や電灯の周りには蜘蛛の巣まで張っていた。

眼鏡をかけて、さっそく部屋の大掃除を行った。きれいになった部屋の座り、ぐるっと見回してみたら、視力が確りした目で見ると、自分の部屋が何となく寒々しく思えてきた。曖昧の世界から明瞭すぎる別世界にきたような気分になった。

もしかしたらソフトフォーカスの視界の中にいたものだから、自分の思考も霞をかけた状態にいたのかもしれない。

視力を取り戻したことで、思考の整理が付けられ、幻聴や幻想が消えるのではないかと期待を持つことができた。物にはすべて物としての境界線があるように思考にも一つ一つに境界線を持てるようになれば嬉しい。

《風の呟き》

隠された大塔

打田昇三

かつて偉大なる錯覚した大日本帝国は確かな資源も無いのに英米などの大国を相手に戦争を始めたら物資不足が生じ、国民は乏しい食糧を隠匿して生き延びた。物を隠すにも高度の技術が要るが其れが大きな建造物となれば尚更である。

釈尊が悟りを開いたという仏教最大の聖地・印度北部のブッダガヤに高さが五十二メートルの大塔が現存するが是は紀元前二五四年に最初の部分

が建造され、少しずつ積み上げられて西暦六三五年に三蔵法師が立ち寄った頃には、ほぼ現在の高さに達していたらしい。

ところが西暦一二〇〇年代に中東ではイスラム勢力が強大化して各地に侵略を開始し其の一部が印度にも押し寄せて来た。宗教でもイスラムと仏教とは全く互換性が無いから仏像・仏塔・寺院などが破壊されることは目に見えている。

ブッダガヤの人々は、何とかして仏塔を護ろうとしたけれども、建造物は疎開避難が出来ない。そこで塔の周りを土で覆い隠す事にした。つまり塔を芯にして山を築いたのである。大変な作業であるけれども人々総出で、此の作業と言うか奇妙な土木工事を短期間で完成させた。

イスラムの大軍がブッダガヤに侵入したとき、目の前には小高い山が在るだけで仏塔は見当たらない。山を崩す元氣も無いからイスラム軍は何もせずに引き揚げる他は無い。大塔は護られたが掘り返すのが大変なので六百年間は土中にあった。

此の塔がイギリスの探検家によって発見されたのは一八八〇年（明治十三年）らしい。それから三年後に浄土真宗の北畠道隆と言う僧が日本人では最初に此の塔を見たと言われている。

縄張り根性丸出し

菅原茂美

世界を眺めると真に騒々しい。みんな自国経済第一主義。国際協調はどこへやら。隙あらば他国の領土をかすめ取ろう…と、虎視眈々。

我が国を取り巻く情勢は、北方四島、竹島、尖閣諸島など、日本固有の領土を奪い盗ろうとする。それぞれの政権が力のある事を国民に示し、体制

の安定化を図ろうとするのであろう。隣国同士こそ仲良く助け合って、地域全体の繁栄を築くべきところを、国家にしる、個人にしる「俺さえ良ければそれでよし」の精神に貫かれている。どうして人類はこんな醜い方向に進化したのであろうか？

折角大脳を膨らまし、文明を生み出したというのに野生動物の縄張り争いそのもの。人間も単なる野生動物の一種に過ぎないのだから、やむを得ないと言ってしまうれば、それまでだけ。

チンパンジーと枝分かれしてわずか700万年。こんな短時間で、本性が変わるわけもなかるうが、人類は言葉や文字や、法律までも生み出した。更に哲学や文学・芸術なども生み出し、遂には「神の概念」までも創造できた。そして博愛主義を説き、自由平等・人権の尊重までも強く掲げ、誰もがこの世に生まれた以上、己の人生を満喫できるよう、皆が理想を抱いた。しかし、理想とは縁遠く、近隣不仲が多過ぎる。近隣仲良く暮らす事こそ第一と考えるが、なぜにこうも人類は縄張り根性が強いのか？

2017年11月、米国のトランプ大統領が初めてのアジア訪問という事で、日本、中国でそれぞれ2泊3日であったのに、韓国へは1泊2日。それが気に食わず色々な反日演出を行った。その一つは従軍慰安婦と言われる老夫人を歓迎祝典に出席させ、トランプ大統領に非礼のハブ。そして料理には日本海の「竹島」近海産とは言わず「独島（ドクト）」産のエビと強調してもてなした。あの姑息な根性の醜さ。更に経済的に最重要の中国ともサードの問題でうまくいかず、そっぽを向かれ、反日感情で国民を煽っている。北朝鮮どころか、韓国の方が国際的に、かえって孤立化しそうだ。

そもそも韓国で誇大宣伝される従軍慰安婦とは、日本の大新聞の自虐的捏造記事が元。その証拠として大新聞は、あれは間違いでした…と後日謝罪している。日本大使館前の少女像は、どう考えても国際道義に反する嫌がらせの行為である。最終的かつ不可逆的に解決済み」のはず。それが更に、世界中多くの国々に、次から次へと少女像を増設している。姑息の極み。

日本・朝鮮半島・中国はいずれも、「漢字」による文化圏。民族として云わばみな同胞。兄弟は他人の始まりともいうが、こんな近い民族同士が、なぜにこんなにも、いがみ合って暮らしているのか。いずれも「仁」を説いた論語に教訓を得た民族同士ではないか。

中国も世界第2位の経済大国と言われるのなら、南シナ海の岩礁を固有の領土などと称し、埋め立て、軍事基地化する姑息な手段をとるべきではなからう。独自のラインを引き、醜い領土拡大が世界平和を乱す。もっと紳士的に生きろ！ いい加減目を覚まして、国際法をしつかり守り、近隣同士仲よくしようではないか。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第七・（二・一）

サラリーマンは何か失敗をすると減俸（げんぼう）処分を受けて給料を減らされる。最初の章段の発音が近いので平安時代でも、そういう制度があったのかと興味が湧くが、これは人名である。平家

物語も中途半端な仏教説話の域を脱して本来の、
と言うか「戦記文学」らしくはなってきた。

抵抗勢力の出現で各地に遠征していた平家軍は、
どの現場でも思うようにならず、次第に追い詰め
られてゆくから滅亡処分を受ける資格者は大勢居
たと思う。そう言う話であれば平家も少しはピリ
っとするのであるが、此の場合の「げんぼう」
は遙か天平年間に存在した、と言うよりも極言す
れば聖武天皇を騙して諸国に国分寺を建てさせた
僧侶「玄昉（玄昉）」のことであるらしい。

平家物語の作者は何でも昔の話を持ち出して来
るが、これも其の一例であるから余り気にするこ
とも無いのであるけれども、原本の巻第七には「平
家一門の都落ち」が入っている。平家に限らず本
拠地に居られ無くなる（単的に言えば「夜逃げ」
をする）というのは余程の大事である。気の毒で
あるが平家物語は此の辺りから「滅亡コース」に
入ってゆくので原作者もそれを意識して表題の
「玄昉」を「還亡」に替えたのかも知れない。

一方で平家を苦しめる源氏のほうは、全くの無
名であった木曾義仲が活躍をする。一時的ではあ
るが都から平家を追い払い、平家が独占していた
政権を手に入れる。然し政治の世界と言うのは昔
も今も得体の知れない権威が暗闇に蠢（うごめ）いて
いるらしく、権謀術数を知らない者が入って行っ
て順調に活躍出来る場所では無いらしい。何より
も源氏同士が「疑心暗鬼」の状態にあった。

木曾軍は、戦乱の影響もあって日本全土が飢饉
に悩まされていた時期に徴発行為で食糧の確保を
しながら平家の本拠地であった京都を占領した。
その行為が、餓えた日本人にチューインガムやチ
ョコレートを配りつつ進駐して来たアメリカ軍の
ように迎えられる訳が無く、結局は平家を追い落

とした功績は無視され厄介者扱いをされる。その
後で自分は手を汚さなかった源頼朝が平家に代わ
る救世主として登場するのだが、先ずは平家物語
でも異彩を放つ木曾義仲の活躍が話題である。

還亡（げんぼう）のこと

平家物語の悪い癖で様々な同音漢字を使うけれ
ども、今回の章段は人名であるから正確に書いて
貰いたいところである。別の原本には「玄昉」と
書いてある。「玄昉」というのは人名であり、諸国
に国分寺が設置される前に死亡した高僧の名前で
ある。怪しい催眠術を使つて聖武天皇の生母・藤
原宮子の鬱（うつ）病を治したことで知られる。

その玄昉と平家とは何の関わりも無いが、原本
に因果話として記載してあるので紹介しておく。

平家の重臣であった上総守藤原忠清と、其の子
飛驒守景家の両名は一昨年に平清盛が死亡した際
に出家をしたのであるが、今度は北陸の合戦で又
も家族（上総大夫判官忠綱と飛驒大夫判官景高）を失ったの
で、その悲しさから嘆き死にをしてしまった。こ
の例を初めとして、平家に従軍していた多くの家
族が或いは親は子に先立たれ、妻は夫に死別した
ため遠い国、近い国から京の都に至るまで、犠牲
者を出した家々では、その門を閉ざして念仏を唱
える声が多く聞こえていた。

寿永二年六月一日、此の日は前章段で斎藤実盛
が討死した日であるが、朝廷の高官は蔵人右衛門
権佐藤原定長（くらんどうえもんごんのすけふじわらのさだ
なが）と神祇権少副大中臣親俊（じんぎのこのしょうお
おなかとみのちかとし）と言う必要以上に長い名の役人
を宮中の清涼殿入口に呼んで「もし合戦が収まっ

たならば天皇は伊勢神宮へ参拝するから準備をす
るように」と命じた。つまり、合戦に負け続ける
平家は、此の段階で後白河法皇に見放されたこと
になるのである。

伊勢大神宮の祭神は、多くの神々が居る天上界
から降下して来られた神様であるが、第十代の崇
神天皇治世二十五年三月に大和笠縫村から伊勢国
度会（わたらい）郡五十鈴の川上に祭祀された。

その時には地面に大きな礎石を埋め、その上に
太い柱を立てて崇め奉つてから、日本六十余州に
置かれた三千七百五十に及ぶ大小の神（天神地祇及
び冥界の精霊の随一とされていた。然しながら其
処に代々の天皇が参拝されることは無かった。

聖武天皇の時代に左大臣藤原不比等の孫であり
参議・式部卿藤原宇合（うまかい）の子の右近衛権少
将兼太宰少貳藤原広嗣（こうこんえんのしょうしようけん
ださいのしょうにふじわらのひろつぐ）という人物が居り、
天平十五年（実際には天平十二年）十月に肥前国松浦で
反乱を起こした。

其の勢力は数万に及び国家の存亡に関わる大事
件であったから、陸奥鎮守府の將軍で有った大野
東人（おおのあずもうじん）を大將軍に任命して現地に
派遣し反乱を鎮圧させた。その結果、事態は収ま
ったので、聖武天皇が初めて伊勢神宮に参詣をさ
れたのである。今回、取り沙汰された天皇伊勢参
りの予定も、其の時の例に倣ったものであるうか
い。ただ当時の天皇は平家血筋の安德天皇である
から微妙な問題を含んでいる。

反乱を起こした藤原広嗣は九州と京都との間を
一日で走る馬を持っていたと言われる。政府軍に
鎮圧されて反乱軍が散り散りになった後も、其の
名馬に跨つて海中に乗り入れ高麗国（朝鮮半島）に渡
ろうとしたらしい。しかし天馬は有っても海馬は

無い。広嗣は捕らえられて斬殺されたが其の亡霊が現れて人々に恐怖を与えた。そこで天平十六年六月十八日（二説では天平十八年）に太宰府の観世音寺で鎮魂の供養を行った。

担当する導師として任命されたのが玄昉僧正なのである。高座に登り法要の鐘を鳴らしたところ其の時に晴れていた空が俄（にわ）にかき曇り、雷が鳴り渡って玄昉僧正の上に落ちた。現代の雷は電気で悪さをするが昔の雷は手動式であったから自分で玄昉僧正の首を取って雲の中へ戻った。

自分を供養してくれる導師に仇を成すのは筋違いであるが、その前に玄昉僧正が「広嗣調伏」の祈禱を担当していたからであろうと言われた。藤原広嗣は執念深かったようである。

玄昉僧正は、吉備真備（きびのみまきび）奈良時代の公卿・学者、遣唐使と共に留学、帰国後に朝廷に出仕、藤原広嗣と対立の留学に同行し、現地で法相宗（ほっそうしゅう）三蔵法師が伝えたといわれる仏教を学んだ。その頃、唐人が玄昉と言う名を貶（けな）して「げんぼう」は還亡に通じる。帰国後に災難に遭う……と言った。それが的中したと思いたくは無いが、天平十九年六月十八日（玄昉死亡の頃）に、天空に千人も居るかと思う程の笑い声がして奈良の興福寺の庭に「玄昉」と言う名入りの頭蓋骨が落ちて来たと言う。

興福寺は法相宗の寺なので僧正の弟子たちが遺骨を納め「頭墓」と名付けた。その墓は平家物語の書かれた頃も存在した。是は明らかに藤原広嗣の亡霊が成せる仕業であり、此の事に依り亡霊は人々に恐れられ崇められて、現在の佐賀県唐津市に祭祀されている。なお、それは唐津の「鏡の宮」と原本にあるが、鏡の宮は神功皇后を祀る宮であり、近くの板櫃（いたびつ）神社が正しいらしい。

一度、悪人にされると神様になっても扱いが粗

末になるらしい。是では余計に崇られる。

嵯峨天皇の時代に、先帝・平城上皇は愛人・尚侍（ないしのかみ）藤原葉子、藤原宇合の曾孫に唆（そその）かされ宮廷の秩序を乱した。その厄祓いの為に嵯峨天皇皇女・有智内親王が選ばれて賀茂神社の斎院に挙げられた。是が斎院（加茂神社に奉仕する皇女、女王）の起こりである。第六十一代朱雀天皇の時代に平将門、藤原純友の兵乱により其の鎮定の為に石清水八幡宮の祭祀が始められたのだが、今回も源平両氏の合戦が原因で様々な御祈禱や神仏の祈願が行われていた。

木曾山門牒状（きそさんもんちょうじょう）のこと

その頃、西に向かつて進撃していた木曾義仲の軍勢は現在の福井県武生市に在った越前の国府に到着した。琵琶湖の東端まで五十キロ程である。主な家臣を集めた義仲は次のように問いかけた。

「是から近江国を経由して京都に入ろうと思うが其の場合に比叡山延暦寺の僧兵たちが抵抗するかも知れない。蹴散らして進むことは出来るが近頃は平家が仏法も寺院も僧侶も無視して居り、それを追討する我々が平家と同じ手段を用いることは出来ない。どうすれば良いであろうか？」

すると木曾義仲の書記官として付いていた大夫房覚明が次の様に意見を述べた。「比叡山に居る僧兵の数は三千人程と思われませんが、此の全員が源氏に味方するとは限りません。源氏に付く者も居れば平家を頼る者も居るでしょう。此処は先ず牒状（書面）を使わして様子を見ましょう……」義仲は尤もである、と覚明に書かせた書状を送った。

「木曾義仲が、平家の所業を見ると保元・

平治の乱以降、長い間、人臣の礼を失っている。是に對し身分の高い者も庶民も為す術が無く、僧も俗世の者も黙って見ている。凶に乗った平家は皇位にも口を出し、諸国の領地を勝手に占有し、道理・非理を論ぜずに官位の在る者を追い、朝廷の重臣を追放したり罪に落した。それらの領地莊園を奪って自分の子孫や家臣に分け与えた。

特に去る治承三年十一月には、後白河法皇を西南の離宮（鳥羽殿）に抑留し、閑白を流罪に処したが、庶民は是に對して物も言えず暗黙の中に非難するのみであった。そればかりか治承四年五月には以仁王の御所を囲んで都の人々を驚かせた。

その高倉王が不当な迫害を受けられる際に園城寺に逃れ、各地に平家打倒の令旨を発せられた。此の義仲も（それを受けて）馳せ参じようとしたところ回りに敵を受けて合戦に加わることが出来なかった。京都周辺の源氏が其の様な状況であれば地方に於いては尚更に決起が困難になる。

園城寺は寺院の規模が狭かったので高倉宮は奈良へ行かれようとして宇治橋で合戦があり、源三位頼政父子が義を重んじ命を掛けて戦ったけれども多勢に無勢で敵わず、多くの兵が屍を河原に晒し流れに命を失う者も多かった。令旨を受けて決起した源氏一族は同族の悲劇を肝に命じて東国や北国から都に攻め上り平家を討とうとしている。

此の義仲も去年の秋に兵を挙げ、信州を発つ日に越後の住人・城四郎長茂が数万の兵を差し向けて来た。是を迎えた義仲は僅か三千余騎の兵力で敵を敗北させた。是を聞いた平家の大将は十万の軍勢を率いて北陸に攻めよせてきた。それを迎え討つために越中・加賀両国の砥浪、黒坂、塩原、篠原などに城を築いて幾度かの合戦に及び、策略を巡らして勝利を得る事が出来た。その有り様は

秋風が芭蕉の葉を破り、冬の霜が草木を枯らすようなものであった。是は全て神仏の御加護に依るもので有って義仲の武略では無い。

程なく平氏は敗北するので、木曾義仲は都に入ることと考えている。其の時には比叡山の麓を過ぎて入洛する予定であるが、その前に案ずることがある。それは比叡山の天台衆徒諸坊が平家に就かれるか或いは源氏に味方されるかが不明なことである。もし、平家に就くのであれば我らは叡山の衆徒と合戦を致す。その様なことになれば比叡山の滅亡(源氏の勝利)は明らかで有り、悲しい事になる。そもそも平家が天子を苦しめ仏法を滅ぼしていることを正す為に我々は義兵を起こしたのであるから、此処で比叡山三千の衆徒と不慮の合戦をすることを我々は望んで居ない。

もし我々が比叡山と戦うような事態になつて平家討伐の進撃が遅れば天皇の命令を疎かにした不忠の臣として武門の恥となることである。その事が心配で我々は迷っている。願わくは比叡山三千の衆徒が神仏の為、国家の為、朝廷の為に源氏に味方して凶徒である平家を罰し、天子の善政に依る恩澤を受けられることを願う。その事を心から願つて此処に書を送る。

寿永二年六月十日

義仲謹んで申す。

恵光坊律師御坊に。

返 牒(へんじょう)のこと

長い割には内容の無い手紙ではあるが、一応は攻めて来た木曾義仲から送られた公文書であるから放つて置く訳にはいかず、そうかと言って簡単に返事が出来る内容でも無いので比叡山の僧(僧

兵)たちは賛否両論で大騒ぎになった。或いは源氏に付こうとする者、或いは平家を見捨てる訳にはいかない……とする者、思い思いの説が述べられたけれども、現代の国会のように強引に多数決にも出来ないから何処までも平行線である。

そこで長老格の僧が相談して「……つまりは当代天皇の安泰を祈るのが比叡山の務めではあるが、平家は天皇の外戚であり比叡山が崇敬している。其の為に平家の繁盛を祈願していた。けれども平家は悪業により国民に背かれてしまった。抵抗勢力を抑えようとして諸国に派遣した平家軍は逆に負けてばかりいる。其れに比べて源氏は、近年の合戦に打ち勝つて運命が開かれようとしている。その様な情勢で比叡山だけが景気の悪い平家に味方しても、どうなるものでも無い。此処は是までのことは忘れて強い源氏に付くべきである……」と。尤もな、と言うか計算高い判断をして書状を書き其の事を木曾義仲に返答をした。義仲は主だった家臣を集め、その返書を覚明に読み上げさせた。返書には次のように書かれていた。

「六月十日付けの書状は同十六日に受取り、是を拝見して我々の気分が晴れ晴れとした。平家の悪業は此のところ数年に及び朝廷に置かれても心が休まる時は無かったと思われて、その実情は人々が知るところである。我が比叡山は都の鬼門を護る堂塔として常に安泰を祈っているが、天下は長年に亘り平家に支配されていたため、平穩を維持することが難しかった。仏教による教えも神の救いも時の権力に侵されて、その力を十分に發揮できなかったのである。

此処に貴家(木曾義仲)が武門の家に生まれ、優れた武将として世に出られた。義兵を起し幾多の合戦に奇策を巡らして平家を苦しめている。

挙兵以来、未だ二年にも成らないのに既に名声が世間に知れ渡っていて、我ら比叡山の衆徒は是を多いに喜びとしており、国家の為に、また源氏の為に武功を感じ武略に感嘆している。そのお蔭をもつて比叡山が安泰にして多くの寺社、其処に安置する神仏、是に奉仕する僧・神官らが無事で居られることを喜びとしている。

其の為に冥界にあつては、薬師如来に従う十二神将が凶賊(平家) 追討に御加勢下さり、現実には当山に籠る三千の衆徒が暫くは修行・学業を中止しても官軍に加勢する決意で居る。

開祖である天台大師(隋の高僧) が説いた真理会得の法は邪悪な者を追い払い、手に印を結んで口に真言を唱えれば安泰を得ると言う。我々も協力して(平家に乱された) 世を正そう思う。延暦寺一同は、この様に決意した。

寿永二年七月二日

大衆等

平家にとつては思いがけない内容であるが話は次の章段に続いて行く。

(続く)

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

一年間暖かい応援を頂きありがとうございました。
「ふるさと風」もおかげさまで139号となりました。
来年もどうぞよろしくお願いいたします。

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど方法センター、いしおか育ち他で販売しております。お問い合わせは、編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集（全6巻）、
歴史の嘘、私本平家物語、
私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、
ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遥かなる旅路（1、2）
- ・木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ
（全24巻）
石岡地方のふるさと昔話、
茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、
霞ヶ浦の紅い鯨、
朗読/ふるさと物語、
随筆/風に吹かれて他

ふるさと風の会編集事務局 〒315-0001

茨城県石岡市石岡 13979-2（白井方） 0299-24-2063

林家とんでん平新春寄席

2018年1月13日(土曜日)

第一部（八軒台・新鮮野菜・石岡そだち）11時開演：入場無料（投銭ご祝儀）

第二部（石岡市・まちかど情報センター）14時開演：入場無料（投銭ご祝儀）

林家とんでん平

先代林家三平師匠の最後の弟子で手話落語の第一人者。デンマーク、ロシア、中国で手話落語公演を行う。2016年7月に、日本縦断3000キロ行脚寄席で、石岡市に寄られ、新鮮野菜いしおかそだちで、野菜に囲まれての高座をもたれ、聴覚障害者の方々と健聴者の方々が一緒に大笑い。石岡では今回二度目の公演。新春にふさわしく、垣根なしの初笑いをお楽しみください。なおとんでん平師匠の前座として、石岡に生まれた「手話舞」を小林幸枝が演じます。



（2016年7月 新鮮野菜「石岡そだち」にての公演）